

■ 書 評



現代精神医学事典

加藤 敏, 神庭重信,
中谷陽二 他編
弘文堂 2011年10月
1400頁, 定価 18,900円

インターネット時代の到来で、人々は疑問や不明な点について辞書をひも解き調べるのではなく、いくつかのウェブサイトを一瞥して合点してしまうことが増えたように思われる。一般書籍においては、その根拠や情報源がほとんどインターネット上の記載に依っているようなものも少なくない。そのような類の情報には何の承認や保証もないというのに。

「こころの時代」や「脳科学の世紀」ともいわれ、精神医学に関わる情報をサイエンスからアートにわたって専門の如何を問わず、多くの人々が求めるようになってきている。しかし、不確かな情報にしばしば惑わされており、われわれ精神医学の専門家といえどもその例外とはいえないのではないか。

こうした中、「現代精神医学事典」の発刊はまさに時代の要請に応えるものであるといえよう。刊行元である弘文堂からは、かつて本邦における精神医学の代表的な事典として高い評価を得た「精神医学事典」が刊行されていた。1975年に初版が出されて以降、1985年に「増補版」、1992年には「新版」が出され、医学系施設の図書館のみならず全国数多くの図書館で収蔵されたという。しかし、「新版」が出されてからすでに15年以上が経ち、近年は絶版の状態となっていた。購入し手元に置きたくとも叶わず、その都度図書館に足を運ばざるを得なかった方も多かったのではないだろうか。

「現代精神医学事典」は、こうした要望や期待にもとづき、既存のさまざまな事典や疾患・障害分類集、用語集などを精査し取捨選択が重ねられ、合計約3000の項目が取り上げられている。第一線で活躍する570名の執筆者によって、精神病理学、心理学、

精神生理学、神経化学、精神薬理学から、児童・思春期精神医学、老年精神医学、社会精神医学、司法精神医学、精神医学史などにわたり網羅され、わかりやすく解説されている。

本書を開くと、「ARMS (at-risk mental state)」や「CATIE 研究」といった、最近の精神医学の進歩が数多く新たな項目として取り上げられていることに驚き、そして期待が高まる。また、「統合失調症 [生物学]」における、近年のMRI脳画像研究の概説とそれを踏まえた「最近では、統合失調症患者の脳は進行性に変性・萎縮するとの見方が優勢になりつつある」の記載のように、従来引き継がれてきた項目についても、新たな執筆者により最新の知見が数多く盛り込まれている。既刊の「精神医学事典」とは異なる全く新しい事典の刊行であるといえる。

本事典の最大の特徴は、代表的な項目について複眼的に記載され、立体的な構造を成している点であろう。例えば、「意識」や「不安」については現象学的精神医学、精神分析、脳科学、「気分障害」や「統合失調症」については歴史、生物学、精神病理、精神分析、社会・文化的観点といったように、それぞれの領域において異なる執筆者によって詳細な解説がなされている。また、「エディプスコンプレクス」や「自我」などにおいては、それぞれ [フロイト]、[ラカン] と付記され別個に項目が立てられており、その対比が非常に興味深い。

一方で、執筆者数が大幅に増えた為であろうか、記載形式のばらつきが大きく横断的に情報を整理する際に不便を生じる場合があり、また紙幅の制限に加えて互いの専門領域の違いがあるとはいえ、記載の内容に物足りなさや偏りを感じざるを得ない項目を見つける読者も少なくはないと思われる。今後さまざまな意見を集約する中で、さらに磨かれ進化していくに違いない。

Nature 誌は2010年からの10年間を「A decade for psychiatric disorders」と謳っており、医学界のみならず広く学際的に精神医学が注目を集め、その発展とさまざまな解明が大いに期待されている。この重要な時期において、本事典はまさに本邦における精神医学のスタンダードとなりうるであろう。

(根本隆洋)